

## ウィリアム・ワーズワース作「虹」の再考察

奥田 喜八郎

(奈良教育大学英米文学教室)

(平成11年4月1日受理)

キーワード： フランス革命、日常語、聖書

イギリスのロマン派詩人ワーズワース (William Wordsworth, 1770-1850) に、「虹」(“The Rainbow”) と題する短詩がある<sup>1</sup>。まず、自然詩人ワーズワースはこう歌い上げるのだ。

My heart leaps up when I behold  
A rainbow in the sky.  
So was it when my life began;  
So is it now I am a man;  
So be it when I shall grow old,  
Or let me die!  
The Child is father of the Man;  
And I could wish my days to be  
Bound each to each by natural piety.

これは1802年春3月26日に作詩された短詩である。そして、5年後の1807年には公にされ、読者を感動させた玉詩である。

ご覧の通り、9行から成る。1行目は8音で、弱音強音、弱音強音、弱音強音、弱音強音の4脚で出来ている。2行目は6音で、弱音強音、弱音強音、弱音強音の3脚で出来ている。3行目、4行目、5行目は各行1行目の韻律と同じ8音で、4脚から成る。6行目は4音で、弱音強音、弱音強音の2脚で出来ている。7行目、8行目もまた1行目の韻律と同じ8音で、4脚から成る。最終行の9行目は10音で、弱音強音、弱音強音、弱音強音、弱音(弱音)強音、弱音強音の5脚で出来ている。

問題は最終行の“-u-ral pi-”の韻律である。弱音弱音強音、といったリズムであるからである。これは、もちろん、naturalを[nætʃərəl]と発音してのリズムである。しかし詩全体の韻律は弱音強音(弱強調)で構成されている。これに倣って、nat-u-ralをnat-u-rlと縮読することによって、この9行目も、詩全体の弱強調の韻律に整えられるからである。一糸乱れることなく全く整然とした韻律構成である。見事である。それにしても、

吉竹迪夫<sup>2</sup>はこの最終行の韻律を、Bound each / to each / by nat / -ural pi / ty. というふうに説明しているのは間違いである。恐らく、…/-ural pi / -e-ty, の誤植であろうかと思われるのだが、しかし、昭和56年の増補版を見ても訂正されていないのだ。

それはそれとして、9行から成るこの短詩の脚韻もまた完璧である。abccabcdd、といったふうに押韻されていて、しかもすべてが完全男性韻である。これもまた見事な押韻構成である。詩とはこうでなければならない。

このほかにも、この詩の表面上の魅力が、もう1つある。それは自然詩人ワーズワースが祖国の言語、すなわち、ゲルマン語系の言葉を頻繁に使用していることである。ラテン語系の言葉naturalとpietyの2語を除くと、すべてがゲルマン語系であるのもまた、詩人ワーズワースの、ワーズワースらしい、ワーズワース独自の新鮮な特色の1つであると強調したい。ワーズワースが生まれて初めて身についた言語、すなわち、母語(mother tongue)を用いているからである。思うに、このワーズワースの母語が「幼稚で、子供っぽい」<sup>3</sup>という批判の弾丸を浴びたのかもしれない。それも、フランス革命のもたらした新しい時代や新しい社会への変革の推移を正しく見極めることのできなかつた固執蒙昧の先輩詩人たちの弾丸であったことを思うと、矢張り、フランス革命の洗礼をうけて、斬新な自然詩人に覚醒する若き詩人ワーズワースの方をたたえたい。

という訳は、1789年のフランス革命は「その後のあらゆる近代革命の原型であると同様に、全ヨーロッパ的である浪漫主義運動の先駆的動乱」<sup>4</sup>として、青年ワーズワースに大きな影響を与えたからである。「王政を倒して民政を布こうとしたフランス革命」<sup>5</sup>に青年ワーズワースもまた同志とともに狂喜した。しかし、革命がいつしか暴走し、むだな血をいやというほど流したことや、そのあげく、ナポレオン(Napoléon Bonaparte, 1769-1821)というとんでもない専制君主を造り上げてしまったフランスに、青年ワーズワースは絶望した。とくに、

「急進主義者がいつしか急進主義的役者になってしまった」<sup>6</sup> ことに、青年ワーズワースは嫌悪した。あれほどの革命騒ぎに躍り狂った青年ワーズワースであったのだが、しかし、彼はいつの間にかナポレオン I 世がフランス皇帝 (1804-15) となるフランスを離れ、故国イングランドに戻り、なによりもイングランドの辺鄙な山岳地方の風景を愛する詩人ワーズワースへと目覚めていったというのは、非常に印象深い限りである。これを好機として、彼は変身し、イングランド的な浪漫主義運動の先駆者としてようやく活躍しはじめるのである。つまり、自然詩人ワーズワースが誕生するのだ。

フランス革命の洗礼をうけたワーズワースは雨と霧に閉ざされた雄大なイングランドの自然を愛するようになる。束の間の雨上がりの、陽射しを浴びる濡れたままのイングランドの気や自然の神秘さを切実に愛するのだ。イングランドの北部の険しい山を愛し、荒れる湖を愛し、四季おりおりに咲く花花を慈しみ、小鳥たちを愛する。山里にひっそりと住む名も知れぬ民衆を愛し、世間一般のひとびとの語る日常語を尊び、感動する。

これら一切の存在は神秘である、と詩人ワーズワースは唱える。そして、ついに、神と自然と人間とは一体のものである、と汎神論者ワーズワースが作品を通して訴えるのだ。思うに、上記で紹介した「虹」という短詩は、このような自然詩人ワーズワースの礎となる作品であり、また、覚醒の作品である、と強調したい。

自然詩人ワーズワースはこう歌い上げるのではあるまいか。

わが心臓が躍り上がる、空に  
懸る虹をおおぎ見るとき。  
そうであった、わが生涯の始まった時もまた。  
そうである、われは大人である今もまた。  
そうであろう、われは老いゆく時もまた。  
さもなくば、われを死なしめよ!  
幼な子は大人の父である。  
して、わが日々をしておたがいに自然の敬虔の  
務めによりて強く縛られたいと願うのだが…。

重複するが、これは1802年春3月26日(金曜日)に書かれたことを、妹ドロシー (Dorothy Wordsworth, 1771-1855) の日記にも記されている通りである<sup>7</sup>。それも簡単に、

... While I was getting into bed he wrote the  
Rainbow

というふうに、である。それから、2カ月後の5月14日(金曜日)の日記に<sup>8</sup>、

... William very nervous--after he was in bed  
haunted with altering the Rainbow

と記されていることに初めて気がついた次第である。日本の内外の研究社たちもまだそのことに気づいていないと思う。それもさることながら、妹ドロシーは「虹」の書き改めの英文の上に、非常に興味深いことを述べているのだ<sup>9</sup>。

... It was a strange night. The hills were covered over with a slight covering of hail or snow, just so as to give them a hoary winter look with the black Rocks. The woods looked miserable, the coppices green as grass which looked quite unnatural and they seemed half shrivelled up as if they shruck from the air. O thought I! what a beautiful thing God has made winter to be by stripping the trees and letting us see their shapes and forms. What a freedom does it seem to give to the storms! There were several new flowers out but I had no pleasure in looking at them...

まだ冬のとどまっている北部イングランドの、夜の山や、森や、雑木林などの無気味な様子を眺めて、妹ドロシーが脅えきっているのだが、しかし、「神は冬を創造した」という思いで、もう一度、眺めてみると、なんと美しい山であり、森であり、雑木林であることか、と賛嘆するのである。冬になると、樹木から木の葉を取り去り、果実を取り去り、木は丸裸になる。丸裸になった木の姿を、神は見せてくださる。これはなんと美しい姿であろうか。暴風雨が吹きつけようとも、なにも不安はない。これはなんと自由の身であることか。ほら、すでに新しい花花が咲き出した、と賛美する妹ドロシーのこの自然観、すなわち、宗教観は兄ワーズワースの自然観・宗教観に徹底的な影響を与えることになるのもまた、意義深い限りである。

神は虹をも創造した。虹は自然界の現象の中でも最も美しいものである。聖書の「創世紀」(“The First Book of Moses.Called Genesis”) の第9章第12節以降に<sup>10</sup>

And God said, This is the token of the covenant which I make between me and you and every living creature that is with you, for perpetual generations;

I do set my bow in the cloud, and it shall be for a token of a covenant between me and the

earth.

And it shall come to pass, when I bring a cloud over the earth, that the bow shall be seen in the cloud:

And I will remember my covenant, which is between me and you and every living creature of all flesh; and the waters shall no more become a flood to destroy all flesh.

And the bow shall be in the cloud; and I will look upon it, that I may remember the everlasting covenant between God and every living creature of all flesh that is upon the earth.

And God said unto Noah, This is the token of the covenant, which I have established between me and all flesh that is upon the earth.

と明記される。すなわち、虹は神と地球のすべての肉なるあらゆる生き物との間に立てられた永遠の契約のしるしであるという。そして、もはや洪水によって滅ぼされることはなく、また地を滅ぼす洪水は、再び起こらないであろうというしるしである。いわゆる、すべての箱舟から出たものは、地のすべての獣にいたるまで、わたしはそれと契約を立てたしるしであると繰り返されるのだ。これは非常に重要である。

また、聖書の「エゼキエル書」("The Book of the Prophet Ezekiel")の第1章第28節に<sup>11</sup>、

As the appearance of the bow that is in the cloud in the day of rain, so was the appearance of the brightness round about. This was the appearance of the likeness of the glory of the Lord. And when I saw it, I fell upon my face, and I heard a voice of one that spake.

と明記される。主のまわりに輝きがあった。それは雨の日に雲の起る虹のようであったという。また、主の栄光の形のものであったという。そして、祭司エゼキエルは虹を見て、顔をふせたとき、語る者の声を聞いたというのだ。そして、それにつづけて、第2章第1節第2節に<sup>12</sup>

And he said unto me, Son of man, stand upon thy feet, and I will speak unto thee  
And the spirit entered into me when he spake unto me, and set me upon my feet, that I heard him that spake unto me,

と明記されている神の言葉は非常に重要である。すなわ

ち、主がわたしに語られた時、霊がわたしのうちに入り、わたしを立ち上がらせたという神の言葉を踏まえて、自然詩人ワーズワースがこの玉詩「虹」を声高らかに歌い上げているからである。詩人ワーズワースもまた、虹をあおぎ見て、祭司エゼキエルと一体になっている、というのがこの短詩「虹」に寄せる筆者の解釈であるからだ。

自然詩人ワーズワースの「虹」を理解するにあたって、もちろん、上記の聖書の神の言葉は絶対に不可欠である。同様に、ギリシャの哲学者プラトンの「魂」<sup>13</sup> 観もまた重要であると思う。

美とか、善とか、すべてそのような真実在が存在するならば、そして、われわれが、それらが前から存在し、それらの真実在が存在すると同じように必然的に、われわれの魂も、われわれが生きる前に存在していたことになる。…

これらの真実在が存在するということと、われわれの魂がわれわれの生まれる前にも存在したこと、同じ必然性をもっていることになる。…

すべてこのように真実在が、つまり、美とか、善とか、その他、あなたがさきにはぼ上げられたすべてのものが、最も十分な意味において存在するということが、最も明白なことではないからだ。…

というプラトンの言葉を下敷きにして、自然詩人ワーズワースが「虹」を高らかに歌い上げていると思うからである。美も、善も、魂も、すべての真実在は、われわれが生まれる前に存在していた、というプラトンの思想を踏まえてみると、詩人ワーズワースが歌う、あの謎めいた3行目の「そうであった、わが生涯の始まった時また」というのもまた、明白となるだろう。

謎めいたといえは、7行目の「幼な子は大人の父である」というのもまた、難解である。これは「三つ子の魂百まで」という諺になっていることは承知しているつもりである。また、「幼い時の性質は老年まで変わらないこと」を意味する諺であることも承知している。

という訳は、詩人ワーズワースは「海辺にて」("By the Sea")と題する14行詩の中に、フランス革命時に知りあった、同志のフランスの女性アネット(Annette Vallon)との間に生まれた私生児キャロライン(Caroline)の哀れな身の案ずる詩行<sup>14</sup>を想起するからである。つまり、

.....  
Dear Child! dear Girl! that walkest with me here,  
If thou appear untouched by solemn thought,  
Thy nature is not therefore less divine:  
Thou liest in Abraham's bosom all the year;

And worshipp'st at the Temple's inner shrine,  
God being with thee when we know it not.

という後半の6行である。特に、3行目の「幼な子の本性は、たとえ私生子であっても、神が持っている性質と同じだ」という詩人ワーズワースの「幼な子」観が切実に歌い上げられているのを思い出すからである。思うにこれは聖書の「ガラテヤ人への手紙」(“The Epistle of Paul the Apostle to the Galatians”)の第3章第26節以降の神の言葉<sup>19</sup>を下敷きにした詩人ワーズワースの幼な子のイメージであろう。

For ye are all children of God by faith in  
Christ Jesus.  
For as many of you as have been baptized into  
Christ have put on Christ.  
There is neither Jew nor Greek, there is neither  
bond nor free, there is neither male nor female;  
for ye are all one in Christ Jesus.  
And if ye be Christ's, then are ye Abraham's  
seed, and heirs according to the promise.

すなわち、あなたがたはみな、キリスト・イエスにある信仰によって、神の子なのであるというのだ。そして、あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって1つだからであり、もしキリストのものであるなら、あなたがたはアブラハムの子孫であり、約束による相続人なのである、という神の言葉を信じて、詩人ワーズワースは、ワーズワースらしく、ワーズワース独自の斬新な、「幼な子は大人の父である」という声高らかな歌い上げるのだと思う。

父というのは、もちろん、聖書の「マタイによる福音書」(“The Gospel According to St. Matthew”)の第1章第2節以降の神の言葉<sup>20</sup>を踏まえた詩人ワーズワースの父のイメージとなっているのだと思われる。

Abraham begat Isaac; and Isaac begat Jacob;  
and Jacob begat Judas and his brethren;  
And Judas begat Phares and Zara of Thamar;  
and Phares begat Esrom; and Esrom begat  
Aram;  
And Aram begat Aminadab; and Aminadab  
begat Naasson; and Naasson begat Salmon;  
And Salmon begat Booz of Rachab; and Booz  
begat Obed of Ruth; and Obed begat Jesse;  
And Jesse begat David the king; and David the  
king begat Solomon of her that had been the  
wife of Urias;

.....

And Jacob begat Joseph the husband of Mary,  
of whom was born Jeaus, who is called Christ.

すなわち、アブラハムはイサクの父であり、イサクはヤコブの父、ヤコブはユダとその兄弟たちとの父であるというふうにアブラハムの子孫の系図を綿綿として語るのだ。そして第16章に、ヤコブはマリヤの夫ヨセフの父であり、このマリヤからキリストといわれるイエスがお生まれになった、という系図を淡淡と語る神の言葉に支えられて、詩人ワーズワースは、「幼な子は大人の父である」とうたい定めるのではあるまいか。

さらに、「大人」というのは、無論、聖書の「コリント人への第一の手紙」(“The First Epistle of Paul the Apostle to the Corinthians”)の第13章第11節<sup>21</sup>に明記される神の言葉を下敷きにして、詩人ワーズワースの大人のイメージを明記しているのだと思うというのが筆者の解釈である。

When I was a child, I spake as a child, I  
understood as a child, I thought as a child; but  
when I became a man, I put away childish  
things.

いわゆる、おとなになった今は、幼な子らしいことを捨ててしまった、という大人をイメージし、そんな大人を戒めながら、詩人ワーズワースは「幼な子は大人の父である」と歌い上げているのだと思う。そして、「大人である今も」「老人になった時も」幼な子らしく語り、幼な子らしく感じ、また、幼な子らしく考えていたいと詩人ワーズワースは厳粛に歌い出すのだと思う。この「幼な子らしく」というのが詩人ワーズワースの斬新な特色なのである。

そうでなければ、「われを死なしめよ！」と歌うのだ。これは突発的な感じを読者に与えるかも知れないが、しかし、それにはそれだけの理由があるからだ。それは詩人ワーズワースか聖書の「ルカによる福音書」(“The Gospel According to St. Luke”)の第16章第22節以降の神の言葉<sup>22</sup>をしみじみと思い出しているからである。

And it came to pass, that the beggar died, and  
was carried by the angels into Abraham's  
bosom: the rich man also died, and was buried;  
And in hell he lifted up his eyes, being in  
torments, and seeth abraham afar off, and  
Lazarus in his bosom.  
And he cried and said, Father Abraham, have

mercy on me, and send Lazarus, that he may dip the tip of his finger in water, and cool my tongue: for I am tormented in this flame.

But Abraham said, Son, remember that thou in thy lifetime receivedst thy good things, and likewise Lazarus evil things: but now he is comforted, and thou art tormented.

アブラハムが言った、『子よ、思い出すがよい。あなたは生前よいものを受け、ラザロの方は悪いものを受けた。しかし今ここでは、彼は慰められ、あなたは苦しみもだえている。』というアブラハムの言葉を口ずさみ、詩人ワーズワースは静かに合掌しているからである。合掌しながら、詩人ワーズワースは願うのだ。決して、「死んで、葬られて、黄泉にいて苦しみもだく」といったような金持の身の上になりたくはないと。せめて、「ついに死に、御使たちに連れられて、アブラハムのふところに送られる」といったような貧乏人の身の上でありたい、と節に願うのだと思われる。しかも、詩人ワーズワースは、聖書の「エゼキエル書」の第18章第4節の神の言葉<sup>29</sup>の明示する「死」を想起するからである。

Behold, all souls are mine: as the soul of the father, so also the soul of the son in mine: the soul that sinneth, it shall die.

つまり、罪を犯した魂は必ず死ぬ、という神の言葉を同時に詩人ワーズワースはよく噛み締めて思い出しているからである。詩人ワーズワースは、自分の魂もまた主な神のものであることを信じ、そして、幼な子らしく語り、幼な子らしく感じ、幼な子らしく考えて、重複するか、ついに死に、御使たちに運ばれて、アブラハムのふところに送られたい、と切実に願いながらも、人生の途中、幼な子らしいことを捨ててしまった時には、どうぞそんな「わたくしを死なせて下さい！」とわがままをねだっているのも、あわれ深い。罪を犯して魂が死ぬまえに、「わたくしを死なせて下さい！」とアブラハムに訴えているのもまた、痛切である。

letというのは、疲れて手を離す、という原義を有する助動詞であるというのは、面白い。というのは、聖書の「エズラ記」("Ezra")の第7章第9節<sup>30</sup>に

For upon the first day of the first month began he to go up from Babylon, and on the first day of the fifth month came he to Jerusalem, according to the good hand of his God upon him.

と明記されている「神の恵みの手」を、詩人ワーズワースは常に意識し、その神の恵みの手にやさしく導かれてゆく自分を厳粛に歌い上げているからである。

以上、玉詩「虹」を読みおえた後で筆者の思うことを感じることは、自然詩人のワーズワースは斬新な汎神論(Pantheism)に裏付けされているということである。重複するがこれは、一切万有は神であり、神と世界とは一体であるとする宗教観であり、哲学観である。これはインドのウパニシャッド(Upanisad・優婆尼沙上)の、すなわち、宇宙の根本原理(ブラフマン=Brahman)と個人の自我(アトマン=Atman)の一致などを説いた、思想である。また、ギリシャ思想もこれに属し、さらに、近代ではスピノザ(Baruch de Spinoza, 1632-1677)や、ゲーテ(Tohann Wolfgang von Goethe, 1749-1832)や、シュリング(Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling, 1775-1854)などの思想もまたこれに属すると力説しておきたい。

イギリスの女流作家エリオット(George Eliot, 1819-80)は傑作『サイラス・マーナー』(*Silas Marner*, 1861)の第13章の中<sup>31</sup>に

She (=The Child) was perfectly quiet now, but not asleep--only soothed by sweet porridge and warmth into that wide-gazing calm which makes us older human beings, with our inward turmoil, feel a certain awe in the presence of a little child, such as we feel before some quiet majesty or beauty in the earth or sky--before a steady glowing planet, or a full-flowered eglantine, or the bending trees over a silent pathway.

と興味深く語るのである。これはまるで自然詩人ワーズワースの「虹」の本質を解説しているような、汎神論者ワーズワースの「虹」を精読しているようなそんな錯覚におちいる描写である。幼な子は大きく眼を見ひらいてまじまじと見つめている。こうした凝視こそ、心に悩みをもった大人のわれわれに、幼な子の前に出て、ある種の畏怖を覚えさせるものであるというのだ。そして、それは地上や空の、ある静かな荘厳さや美しさま前に、一不断に輝く星や、満開に咲きほこる野薔薇や、物音1つ聞こえない道の辺に枝をたれた樹木の前に、感じる、そういった畏怖の気持ちと同じものである、というエリオットの言葉を味わってみると、自然詩人ワーズワースの歌う「幼な子は大人の父である」というのもまたうなずくことができよう。父というのは、エリオットの指摘する、いわは、一種の畏怖(a certain awe)をイメージするものであると強調したい。それはまるで空に懸る虹をあ

おぎ見るときに感じる、といった畏怖の気持ちと全く同じものであると確信したい。幼な子もまた然りである。

更に、エリオットはその第14章の終わり<sup>24</sup>に、イングランドに伝承されている古い昔話の「白い翼をもった天使」の話を語るのだ。

In old days there were angels who came and took men by the hand and let them away from the city of destruction. We see no white-winged angels now. But yet men are led away from threatening destruction: a hand is put into theirs, which leads them forth gently towards a calm and bright land, so that they look no more backward: and the hand may be a little child's.

イングランドに語り継がれている有名な昔話によると、人々の手をとって、破滅した町から遠くの上地へ、人々を連れ去って行く天使たちがあった、というのだ。これは聖書の「創世記」の第19章第1節から第29節<sup>25</sup>までに明記されている「2人の御使とロト」(two angels and Lot) にまつわる神の言葉を踏まえた古い話である。「破滅した町」(the city of destruction) というのは、その第24節<sup>26</sup>に、

Then the Lord rained upon Sodom and upon Gomorrah brimstone and fire from the Lord out of heaven.

と明記されている「ソドムの町」(Sodom) を示すのである。なにとはまあれ、エリオットは、今日では、そのような白い翼をもった天使の姿をわたしたちは見ることができない、と嘆く。そして、それにもかかわらず、矢張り、人々はおそろしい破滅の中から救われてゆくのだという。それも1つの手が、彼らの手にさしのべられて、その手は人々を静かな明るい国へと、やさしく導いてゆくのだと語る。そして、人々は、2度と後をふりかえって見ようとしなれないと言い、その手とは、幼な子の手でもあろうかと語りおえるのである。思うに詩人ワーズワースの歌い上げる「幼な子は大人の父である」という「幼な子」や、「父」や、「大人」のイメージもまたこれで明らかとなるだろう。

「子は鎧」であるとよく聞くことばだ。これは「子どもは夫婦の間をつなぎとめる働きをする」という意味であるが、詩人ワーズワースの歌う「幼な子は大人の父である」という「幼な子」は、古い古い昔に登場する白い翼をもった天使の身代わりであって、大人たちをおそろしい破滅の中から救い出してゆく、と歌うのだろう。そ

れも、幼な子の手が、大人たちの手にさしのべられて、大人たちを静かな明るい国へと、やさしく導いてゆく、とうたい上げるのだ。

父というのは、重複するが、もちろん、聖書の「マタイの福音書」の第6章第9節<sup>27</sup>に

After this manner therefore pray ye: Our Father which art in Heaven, Hallowed be thy name.

と明記されている、いわゆる、「天にましますわれらの父よ」の父を鮮明にイメージするものであると解釈したい。

#### 注

- (1) Thomas Hutchinson, *The Poetical Works of Wordsworth*, (London: Oxford University Press, 1961), p.62.
- (2) Michio Yoshitake, *My Favourite English Poems* (Tokyo: Chuukyo-shutupan, 1970), p.58.
- (3) Torajiro Sawamura, *Select Poems of William Wordsworth*, Kenkyusha English Classics (Tokyo: Kenkyusha, 1925), pp.180-181.
- (4) Yutaka Tauno, *French Revolution's Night Talk* (Tokyo: Asahi Newspaper Press Co., LTD. 1960), P.4.
- (5) *Ibid.*, p.5.
- (6) *Ibid.*, p.6.
- (7) Mary Moorman, ed. *Journals of Dorothy Wordsworth: The Alfoxden Journal 1798, The Grasmere Journals 1800-1803*, Second Edition (London: Oxford University Press, 1978), P 106.
- (8) *Ibid.*, p.125.
- (9) *Ibid.*
- (10) *The Holy Bible, Containing the Old and New Testaments* (London: Collins' Clear-Type Press), p.12.
- (11) *Ibid.*, p.733.
- (12) *Ibid.*
- (13) Mie Ikeda, trans. "Phaedo," vol. 1. in *Plato*, 2 vols. gen ed Michtaro Tanaka (Tokyo: Chuo koro nsha, 1978), p.523.
- (14) Hutchinson, p.205.
- (15) *The Holy Bible*, p.191.
- (16) *Ibid.*, p.3.
- (17) *Ibid.*, p.176.
- (18) *Ibid.*, p.81.

- (19) *Ibid.*, p.748. (22) *Ibid.*, p.131.  
 (20) *Ibid.*, p.467. (23) *Ibid.*, p.19-20.  
 (21) David Carroll, ed. *George Eliot : Silas Marner, the Weaver of Reveloe*, Penguin Classics (London . Penguin Books, 1996), P.118 (24) *Ibid.*  
 (25) *Ibid.*, p.7.

## On William Wordsworth's Poem "The Rainbow" Again

Kihachiro OKUDA

(Department of English & American Literature, Nara University of Education, Nara 630-8528, Japan)

(Received April, 1999)

William Wordsworth (1779-1850) was a British poet whose most important poem titled "The Rainbow" was written on March 26th, Friday, in 1802, and altered on May 14th, Friday, in, 1802, and published in 1807. According to his friend Samuel Taylor Coleridge (1772-1834), his seniors severely criticized the poem as despicable puerility

The purpose of this paper is to help you become a better reader of English poems. Why? Simply because poetry conveys the basic rhythm and beat of the language.

This best easy short poem of "The Rainbow" can be appreciated in a full way by all of us. The key to this appreciation lies in understanding how the poet manipulates and draws upon our own attitudes and responses in order to create the meanings of the poem.

This paper analyzes the rules of prosody of the poem "My heart / leaps up / when I / be-hold" (iambic tetrametre), "A rain / -bow in / the sky" (iambic trimetre), ... "Or let / me die!" (iambic dimetre), ... and "Bound each / to each / by nat / -u-ral pi / -e-ty" (iambic pentametre). This metre is a regular one. The poem also has a regular correspondence of sounds, especially at the ends of lines (=abccabcb). This is also a regular rhyme. The author in this paper examines the symbols and imagery of "rainbow (=bow)," "child," "father," and "man," on the basis of *the Bible containing the Old and New Testaments*.

**Key Words:** French Revolution, the language of ordinary speech, the Bible